

清流

題字：芳野 充

令和3年5月30日
第53号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

温もりの心で接する

「善き人が使えばよくなり、悪人が使えば悪しくなる」これは、『日暮硯』という本のなかにてでくる恩田木工の言葉です。江戸時代中期、相つぐ水害、火災、藩内の不正や汚職、農民一揆などにより財政難に苦しむ信州松代藩十萬石真田家。その藩主幸弘より、藩を再建すべく登用されたのが本書の主人公、恩田木工でした。

彼は改革にあたり、長い間政治不信におちいつている領民たちの信頼を取りもどすため、「嘘をつかぬこと」「自らを厳しく律すること」を誓い、また領民たちには笑顔で接し、ときには手に鉄をにぎりとも汗を流しました。藩内で不正を働く役人には、今後過ちを犯すことのないよう手を打ち、罪を悔い改めさせいっしょに改革を進めていく仲間としたのです。そのときに案じる藩主に言ったのが、冒頭の言葉でした。結果、領民と藩士の心をつかみ、彼は藩政改革を成功させていったのです。

品性を豊かにするための「二十の徳目」の十番目は、「温厚」です。「温厚」とは、「おだやかで温かいこと」。藩政改革をおこなった恩田木工は、拔群のリーダーシップを発揮しながらも温厚な人物だったことがうかがえます。十数年前のわたしは、温厚という人物からとおく、それゆえに心苦しい失敗を何度も味わってきました。

なかでも女性スタッフを雇用したときのこと。当時のわたしは、従業員は低賃金でながく働かせてなんぼ、といういわゆるブラック企業の考え方をしておりました。ですから、休日出勤や夜十時すぎることは当たり前、残業代や賞与などは考えたことがありませんでした。そんなある日、その女性スタッフの母親から「娘がツラそうにしているから、せめて八時には帰してほしい」と連絡がありました。わたしは「分かりました」とかろく返事を返しましたが、状況を変えることはありませんでした。いつも笑顔で明るく人懐っこい性格の彼女から、やがて笑顔が消えていき、体調をくずして会社を去っていききました。

素心学塾塾長の池田繁美先生は、冒頭の恩田木工の言葉を別の表現で、「『温もりの心があれば良くなり、冷たき心では悪くなる』。まわりを良くするのも悪くするのも、その人の心に温もりがあるかないかで決まるように思えます」とおっしゃいます。当時のわたしに温もりの心があれば彼女の良いところを引き出し、いまも残ってくれていたかもしれません。胸を痛めるような失敗を忘れることなく、温もりの心で接することで相手の良さを引き出せる、そのような人物に近づきたいと思えます。

加来 寛

